

講演 3

ユニセフと女子教育

平林 国彦*

今日は若い皆さんがいらっしゃるということを聞いて、お話しできることを楽しみにしてまいりました。私は心臓外科医で、10年ほど病院などで医療に従事し、その後、国際保健の分野に入りました。なぜ心臓外科をやっていてこういう分野に入ったのか、そのことは最後にまたお話ししたいと思います。

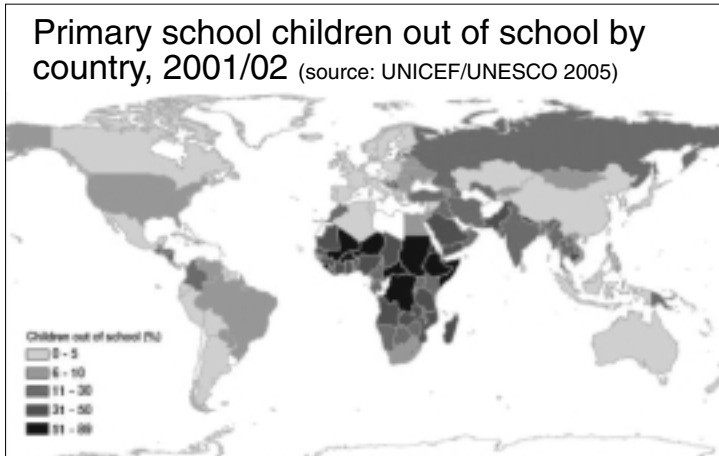
ユニセフというのは、UNICEF: United Nation Children's Fund「世界児童基金」と言います。子どものための機関だということは分かると思うのですが、では何をやっているのかというと、スタッフには、私のような医者や、教育をやっている人、エンジニアもいます。井戸を掘っている人もいます。法律家もいるという、いろんな職種の人が働いている組織です。もともとは第二次世界大戦後、子どもたちへの緊急対応のためにできた組織です。

今、世界では1億1,500万人の子どもが学校に行けていません。これは日本の人口と同じ数字です。世界の子どもで5人に1人は学校に行っていない計算になりますが、特にアフガニスタンやウズベキスタンなど南アジアやアフリカ諸国で、子どもが学校に行けていない（図1参照）。その1億1,500万人のうちの53%にあたる6,200万人……この数字は何でしょう。分かる

*平林国彦氏 ひらばやし・くにひこ：ユニセフ東京事務所次席代表（Kunihiko Chris Hirabayashi: Senior Programme Officer, UNICEF Tokyo）

1958年生まれ。筑波大学医学専門学群卒業。筑波大学大学院博士課程修了、医学博士。筑波大学付属病院、神奈川県立こども医療センター、茨城県立子供病院などに臨床医として勤務、主に小児心臓外科の領域を専門とする。約10年間、国立国際医療センターの医師としてインドネシア、ボリビアなどに派遣、JICA専門家としても活動する。2003年からユニセフ・アフガニスタン事務所（保健・栄養部部長）、レバノン事務所（同、緊急プログラム担当）、06年から現職。

図 1



人はいますか？ 6,200 万人というのは、学校に行けていない女の子の数なのです。1 億 1,500 万人のうち、女の子が 6,200 万人、学校に行っていない。

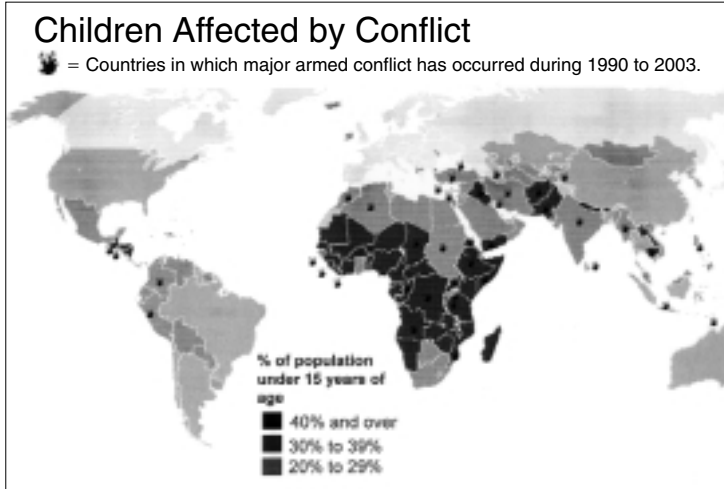
我々ユニセフは、特に女子の教育のことを問題にしたいと思います。私は 2 人の娘の父親ですが、皆さんと同じぐらいで、上の子は 18 歳です。たまたま日本は今、女の子は男の子と同じくらい学校に行っていますが、特に中東諸国、南アジア、西と中央のアフリカでは女の子の多くは学校に行っていない。そしてアフガニスタンの例で言いますと、学校に行っていない女の子は例えばカーペットを編んでいる。なぜ子どもがカーペットを編むのか。それは子どものほうが手が器用だからとよく言われます。「子どもは手が器用だから、いいカーペットができるんだよ。だから子どもがやったほうが、お金がいっぱい入る」と。これは正しいと思いますか。私は嘘だと思います。ほとんどのいいカーペットは、熟練した女性が長い年月をかけて作っているのです。なぜ子どもにやらせるかという、安いからです。賃金が安いから子どもを雇うのです。特に女の子は、そういう対象になりやすく、アフガニスタンなどでは、そういうあやまった考えのもとに子どもが学校に行けない状態が続いています。

アフガニスタンの女の子の学校に行けない確率は、男の子の2倍です。特に南のカンダハールなどでは、本当に多くの女の子は学校に行けていない。今はちょっと改善されていますが、先ほど黒田先生は「教育は人権だ」とおっしゃいました。女の子は学校に行けなくていいのでしょうか。私の母親の時代は、経済的理由でそういうこともあったようですが、今の世の中、特に初等教育はほとんどの国では無料になってきています。なぜ女の子は学校に行けないのでしょうか。それにはいろいろな理由がありますが、実際に学校に行けない子どもたちを見てみると、母親が教育を受けていないことが多いのです。小学校に行っていない子どもの母親の75%が、十分な教育を受けていないことが分かりました。教育を受けていない母親たちの子どもは、教育を受けている母親の子どもと比べて、2倍学校に行けていない。母親が教育を受けていないと、特に女の子は学校に行けない。ということは、いつまでもこの連鎖は止まらないわけです。もう一度言いますが、中東と北アフリカ、西と中央アフリカ、南アジアの国々では特に、母親が教育を受けていないと学校に行っていない子どもが多い。だから、女性の教育をしないと子どもが教育を受けられないという世界的事実があるのです。

私は今まで、いろいろな国で働いてまいりました。日本では主に大学病院や子供病院にいたのですが、その後中央アメリカに行って、南アフリカ、インドネシア、アフガニスタンに3年、レバノンの戦争の間はずっといました。特に戦争のある国——この13年でどういう国に戦争が起きたかを、黒いドットで示していますが(図2)——は、実は子どもが多い国なのです。ということは、戦争は子どもが多い所に起こっている。いろいろな意味で子どもが被害に遇っているということです。教育はその一つです。確かに、学校に行けていない子どもが多い所、教育の悪い所に戦争が起こっています。

しかし、私が見てきたのはそれだけではない、ちょっと違います。例えば戦争で、子どもが実際に被害に遇って、死んでいる。だいたい今の戦争で死ぬのは、子どもと女の人です。制服を着た人が死んでいるのではない。

図2



(出所) UNICEF 2006.

5、6割が非戦闘員で、特に子どもは犠牲者の約40%にもなります。また傷を負った多くの子もたちがいました。でも体だけが傷ついているわけではないのです。戦争の場合は、災害もそうですが肉親が死にます。レバノンでお母さんが死んだ女の子に会いましたが、そのことで心が傷ついています。

また、お母さんの精神状態が悪くなる。すると、子どもはどうなるか。子どもの情緒が不安定になります。お母さんは特に家族のことを考えます。家族が死んだり、もしくは家が壊れる、お金がないことが心にのしかかってきます。お母さんの精神が不安定になると、それが子どもにも影響します。それだけではないです。大人たちが相手のことを非難する、怒る。するとそれは、子どもに伝播するのです。大人たちの怒りが子どもたちに伝播し、子どもがその怒りを蓄積していると、10年、20年たって、また大きな怒りのサイクルが始まるわけです。だからそういう子どもたちの怒りというのは、非常に気をつけないといけない。悲しみのエネルギーを怒りに変えてはいけないのです。だから教育が必要なのです。教育というのは、子どもたちに正常で安定した環境を与えることができるのです。できれば紛争

の最中でも教育を与える。もし紛争や戦争が起きていればなかなかできないのですが、戦争が終わった次の日からでも教育をやったほうがいい。それはなぜかという、子どもたちを正常な心に戻すことができるからです。これが教育の一つの大事なところですよ。

実は、災害、紛争は、特に女の子たちに影響を与えています。一つは、戦争があると学校が中断されます。特に、女の子は学校に行かれない状況になります。女の子が学校に行けないのにはいろいろな理由がありますが、事実として、国内避難民の女の子の10人に1人しか学校に行けていない。それはなぜかという、危ないので親が行かせない。親が危ないと思う以上に、戦闘員が女の子に性的な暴力をすることもよくあるのです。それから戦闘の間には、早く結婚させたいという感情がよく芽生えるのです。そのほうが安全だからということです。若い人はよく兵隊に行く前に結婚するとか、戦闘の間は強制的な若年結婚などが生まれやすい。アフガニスタンで言いますと、60%以上の結婚が16歳以下です。

また、先ほど申し上げた軍による性的搾取というのがあります。「チャイルド・ソルジャー」という言葉をよく聞きますね。チャイルド・ソルジャーのイメージは、皆さん、どういうものでしょうか。よくテレビに出てくるのは、銃を持った子どもです。あれは本当のチャイルド・ソルジャーですが、そういう人たちは戦争が終わった後、援助の対象になりやすいのです。でも実は、チャイルド・ソルジャー以外にもいろいろ戦争に駆り出されています。男の子ですと、例えばコックになる。食事を作ったり身の回りの世話をしたり、洗濯をしたりします。女の子もそういうことに駆り出されますし、なかには性的な対象になって、兵隊のなかに閉じ込められてしまう。でもその子どもたちは、公的な保護からは見捨てられてしまうのです。

特に女の子はそういうことが起きると、正常な生活になかなか帰ってこられない。それでまた学校に行けなくなる。いろいろプレッシャーがかかってくる。女の子には特にそういう傾向があります。一つは、家庭を助けなくてはいけない。弟たちの面倒をみないといけないというので、よく家

庭労働をする子もいます。また親のなかには、いいと思って子どもを外に出す。実はそれが人身売買だったりするのです。お父さんが兵隊で足を怪我して、歩けなくなる。すると経済的に負担がかかってきます。すると女の子がそれを見かねて労働に出たり、逆に売られたりしてしまう。女の子はそういう対象になりやすい。それから戦争中は、女子の教育への理解が低いというカルチャーもあるのです。先ほどの治安が悪いとか、通学させるのに適切な洋服が手に入らないという理由で、女の子のほうがより学校に行けなくなる。ですから紛争があればあるほど教育の機会に恵まれなくなって、機会に恵まれないがために学校に行きにくくなって、学校に行きにくくなると、家庭に負担をかけまいとしていろいろな被害に遇ってしまう。こういう連鎖になってしまいます。

そればかりではありません。今はアジアの話でしたが、アフリカの話します。皆さんはアフリカにどんなイメージがあるでしょうか。アフリカは素晴らしい国ですが、残念なことに紛争が多くて、さらにエイズが多いのです。女の子が、より HIV 感染のリスクが高い状況にあります。なぜ学校教育が悪くて紛争が多いと HIV / エイズになりやすいかというと、先ほど言った性的搾取など、暴力とかが起きやすい。また、エイズよりは戦争で死ぬ確率のほうが高いだろうということで、あまりコンドームを使わない。そういうことが起きやすいのです。だから女の子が感染しやすくなる。それから、特に国内避難民などでよくあることですが、女の子たちは、食料を得るために自らの体を提供してお金を取ることも多いのです。アフリカの中には、若い女の子とはセックスをしてもエイズにならないという意味のない迷信があります。だから若い女の子ほど、ターゲットになりやすい。だから戦争になると、女の子は教育も受けられなくて人身売買の可能性もあって、かつエイズにもなりやすいわけです。

私が問いたいのは、これは果たして他人の問題なのか、ということです。ユニセフが学んだことは、女の子たちは教育を受ける機会がより制限されるし、紛争時や災害時は、よりその危険性が増すということです。だから女子教育の問題は感染症や貧困と密接に関連していて、単に教育だけやれ

ばいい、単に感染症だけやればいいというのではなくて、全人的、総合的にアプローチすることが必須です。

このように、特に災害や紛争後は、女の子に対する教育をしなくてはならないのですが、逆に紛争という不幸を利用することができるのではないかと、ということを考えています。なぜかというと、紛争でだいたい壊れてしまいますから、逆にいいものを作る機会になると。だから紛争をネガティブにばかり見ないで、それで平和が始まるのだったら改める機会にしよう。今までは元に戻ればいいと思ったのですが、元に戻したら悪いものがそのまま残ってしまう。だからより良いものにしようと考えています。今いちばん言いたいのは、building back betterということです。どうせ壊れてしまったのなら、もっといいものを作ろう。これが今、特に女子教育にとっては大事だと思います。それから、上から降ろすのではなくて、人々の意見を聞いて、特に若い人や子どもたちがこういう教育に参加していないといいものはできません。この三つを特に強調したいのです。

では、今我々に何ができるかですが、我々の事務所は、世界中の160ぐらいの国と地域にあります。国際機関というのは、日本も含めて世界中にあります。ということは、普遍的なこと、世界的なことができるわけです。しかし、私たちは1人ではできないのです。例えばアカデミックなことは、大学の先生がどういうものが一番有効な方法かを考えることができますし、NGOは草の根でどういうことができるかを考えます。今我々のやっていることは、まずアクセスをよくしようということです。セイフ・アクセス・トゥ・スクール（safe access to school）と言いますが、学校を女の子たちの家から安全な距離に、今度造るときにはやり直す。制服をあげたり、女性の先生を増やすこともやっていますし、先ほど申しました教育の質については、先生の教育も非常に大事です。先生の教育というのは、先生に対して、女の子の教育が大事だと、女の子には特別の配慮をしないと学校に来られないと、そういう意識を作って、男女平等を含めて教育をやっていく。それからカリキュラムを改善する。特に教育の質は非常に大事です。

今、教育こそが平和の定着に最も必要だと考えています。なぜかという

と、教育をすると人々の心、特に子どもたちの心が普通にに戻りますし、教育についての重要性は誰も文句を言わないです。一時、タリバーンは女性の教育を否定したことがあります。世界の大人で子どもたちに教育をしたくないという人はほとんどいません。教育というのは、本当にユニバーサルなものなのです。そうするといろいろな人が参加してきて、それが平和の礎になり得る。だから、教育を平和の砦にすることができるわけです。先ほどお話しされた黒田先生も、このような思いでいらっしゃるのではないかと考えます。

さらに私たちは、子どもに優しい教育や学校を作ろうという運動もしています。単にトイレを造るというのではなく、いろいろな視点から13のチェック項目を設けています。それから、紛争や災害があった第一日目から学校がスタートできるように、いつもストックしているスクール・イン・ア・ボックスというものとレクリエーション・キットを、24時間態勢で配布できるようにしています。もし何かあったときには、このボックスを持って行けば、先生の教材からレクリエーション・キットも含め、一切合切入っています。これをワンセット、24時間以内に発送できる態勢をとっています。これが我々のやっていることで、特に災害時、女性に対して行うことが大事だと考えてやっています。

最初にお話ししましたが、1億1,500万人という日本の人口と同じ人数の子どもたちが学校に行けていない。6,200万人という女の子が学校に行けていない。これは他の国の問題なのかということ、私は皆さんに、特に若い人に聞きたいのです。先ほどから、いろいろな話を申し上げましたが、こうした私たちの活動は施しなのでしょうか。人を助けるからやるのでしょうか。なぜあなたたちは「国際科」に来たのか。お聞きしたいと思うのですが、あまり明確には答えられないでしょう。私が感じたことを言いますと、これは人を助けるためにやるのではない、施しでもないだろう、これは我々の問題だということです。

最後に、数字にすると非常に難しいので写真をお見せします（次ページ写真）。これは有名な写真ですが、子どもが写っていますね。おそらくアフリ



(出所) Kevin Carter, 1994.

カではないでしょうか。背景に秃鷲が写っています。何を狙っているのでしょうか。子どもを狙っているのでしょうか。子どもは痩せていますか、太っていますか。痩せていますね。お母さんがいますでしょうか。いませんね。こういうことが日常茶飯事で起こっているけれども、実は我々はそれに気づいていないのです。気づいていないということが、果たしていいことなのか。私はこの写真を見て、心臓外科医を辞めてこういう世界に踏み込んだのです。いま少なくとも私が人生の先輩として皆さんに言えることは、1億1,500万人の学校に行けない子どもがいて、6,200万人の女の子が学校に行けていないのは他人のことではなくて、我々の問題ではないかということなのです。

もっと大事なことは、国際機関ができるとか、JICAができる、世界銀行ができるということではなくて、私たち市民も参加しなくてはならないということです。国際機関の有意義なところは世界中にあること、NGOは草の根でできる、世界銀行はお金を供出できる、政府は教員を養成したり、カリキュラムを作ることができる。しかし重要なことは、単独で行うのではなく、いろいろなパートナーとやらないといけないということです。なぜこういうことを申し上げるかという、アフリカや他の国で深刻な問題が起きていれば、日本1国だけが繁栄できることはあり得ないことだからで

す。特にスカンジナビア諸国では、皆そういう意識は強いです。なぜかという、紛争が起きると難民が増え移民問題になります。経済も駄目になります。要するに他の国が発展しない限り、1国だけで繁栄できるということとはあり得ないのです。施したとか、助けてやるとかいうのではなくて、自分たちが繁栄するためには他の国も繁栄しなくては駄目だ、という意識が必要だと思います。

ユニセフの事務所が東京の南青山にありますので、ぜひ気軽にお立ち寄りください。特に若い人は歓迎します。今日はどうもありがとうございました。